

二〇一五年度

(二月二日)

適性型入学試験

適性Ⅰ(作文型)

試験にあたって

- 一 開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 二 問題は全部で三ページにわたって印刷してあります。最初に枚数を確認してください。
- 三 解答用紙は一枚で、問題用紙と違う白い用紙に印刷されており、問題用紙の中にはさんであります。
- 四 試験時間は四十五分間です。終了5分前になったら知らせます。
- 五 最初に受験番号と氏名を解答用紙の決められたらんに記入してください。
- 六 声を出して読んだり、他の人と筆記用具などの貸し借りをしてはいけません。
- 七 検査Ⅰの解答に当たっては、すべて解答用紙に縦書きで記入してください。
- 八 答案を書き終わっても座席からはなれないでください。
- 九 終了の合図後、係が解答用紙を集めます。

多摩大学附属聖ヶ丘中学校

適性 I

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言葉の変化で一番議論になるのが、「ら抜き言葉」です。私が放送で若者たちの「ら抜き言葉」をいつもたしなめていることは前にも書きましたが、ますます広がっています。

「これ、食べれるよ」

「いま出れる？」

「あそこ、見れるかな？」

私がよく通勤で通る渋谷の街角は、こんな「れる」言葉があふれかえています。年輩ねいの方がもつとも気になる言葉ではないでしょうか。私も大変気になるのですが、しかし、言葉というものの性格からすれば、「ら抜き言葉」の出現には必然性があるのです。

一九九五年（平成七年）、国語審議会しんかいは「共通語においては、改まった場での『ら抜き言葉』の使用は、現時点では認知しかねるとすべきであろう」という答申を出しています。「ら抜き言葉」は次第に定着する傾向にあるので、日常会話ではもう仕方がないけれど、公式の場所などでは、いまのところ、まだ認めるのはいやだよ、ということをもってまわった言い方です。

そもそも「られる」という言葉は、いくつもの意味を持ちます。ただ「見られる」と言っただけでは、「見る」とができるのか「誰たれかに見られたのか」、「どなたかがご覧になった」のか、はっきりしません。この中でもっとも使われることが多いのは、可能の意味の「られる」です。たとえば「食べられる」Ⅱ「食くべることが出来る」です。だったら、可能という意味の方に限って、「食べれる」と言えば、「食くべることが出来る」という意味が誰にも誤解なく伝わるはずですよ。誤解が少なくなるという意味では、むしろ合理的な方向に進みつつあるというところも可能なのです。

「見れる」「食べれる」という言い方だけが槍玉やりだまに上げられますが、もともと「行く」の可能形は「行かれる」、「読む」は「読まれる」と言っていたこともありません。こうした五段活用ごだんかぎようの動詞は、江戸時代から明治にかけて、

「行ける」「読める」と変化しました。

それが今度は、「見られる」や「食べられる」のような一段活用の動詞でも変化が起こり始めたのです。

実は「見られる」という言い方自体、変化してできた言葉です。江戸時代のころには「見らるる」と言っていましたし、それより前の平安時代は「見らる」という言い方でした。「見らるる」こそが正しい言い方だと思っている人は、「見られる」という言い方だつて、言葉の乱れと考えるはずです。

私自身は「ら抜き言葉」が嫌いですが、私が使わなくても、「ら抜き言葉」は間違いなく定着するでしょう。それは言葉の本質から見れば歴史の必然だと思えます。個人的には寂しいのですが。

言葉は生き物です。常に変化しています。この変化を「ゆれ」と考えるのか、「乱れ」ととらえるのか。人によって立場は異なるでしょう。「言葉の乱れ」を嘆く人はいつの時代にもいるのですが、言葉は、生きているからこそ、「乱れ」たり変化したりするのです。ヨーロッパのさまざまな言葉のもとになったラテン語は、乱れることがあります。「死んだ言葉」だからです。誰も日常生活で使っていないので、乱れることもなければ、変えることもありません。ヨーロッパの人の教養として学ばれるだけなのです。国語学者の金田一春彦さんのお父さんの金田一京助さんは、「言語の変化は言語の発達であり進化である。変化をよそにしては言語の生命がない」と断言しています。

人間には過ちがつきものです。私たちは、日常会話で、しばしば言葉づかいを間違えます。それが自然なことでしょう。その間違いが、その場かぎりで姿を消すこともあれば、広く社会に通用することもあります。やがて、それが新しい言葉づかいになります。それが、生きていて、ということなのでしょう。言葉は、誰もが使うことのできる道具です。誰もが使えば、次第に、みんなが使いやすいものに変わっていくでしょう。急激な変化は、古くからの道具に慣れ親しんだ人にとっては戸惑うことかもしれませんが、言葉という道具は、自らを変化させることで、新しい時代にも生き続けることができるのではないのでしょうか。

(池上 彰「日本語の『大疑問』」より。本文には都合により省略した部分があります。)

問

筆者は「ら抜き言葉」に変化するの言葉の本質からすれば必然だと述べています。これはどういうことですか。筆者がいう「言葉の本質」がわかるように一二〇字から一五〇字以内で説明しなさい。

問

この文章を読んで、あなたが「言葉」について考えたことを、次の〔注意〕と【原稿用紙の書き方】に従って書きなさい。

〔注意〕

- あなたの経験を具体例としてあげて書きなさい。
- 適切に段落を立て、三六〇字以上四〇〇字以内で書きなさい。

【原稿用紙の書き方】

- 題名、名前は書かずに一行目から書き始めなさい。
- 書き出しや、段落をかえた時は、一マスあけなさい。
- 読点、かぎかっこはそれぞれ一マスに書くこと。ただし、句点ととじかぎかっこ（。）は同じ一マスに書きなさい。
- 句読点が行の一番上に来てしまうときは、前の行の一番最後の字とっしよに同じマスに書くこと。

二〇一五年度 **適性I** 採点基準

問一

失格条件

- ・ 字数制限の範囲内で書いていない
- ・ 指示された内容からかけ離れた内容である

基準一

説明		
③	②	①
出題の意図に添えておらず必要な言葉もない・説明として意味が通らない	出題の意図には概ね添えてはいるが説明が不足していたり具体性に欠けていて明確ではない	言葉の本質を的確に捉えら抜き言葉の必然性が具体的にわかりやすく説明されている
0点	15点	25点

問二

失格条件

- ・ 字数制限の範囲内で書いていない
- ・ 指示された内容からかけ離れた内容である

基準一

具体例		
③	②	①
ふさわしい具体例があがっていない	例はあがっているがふさわしくない	ふさわしい具体例があがっている
0点	10点	20点

基準二

内容		
③	②	①
意見考えがない	意見考えが消極的または不明確である	意見考えが積極的で明確である
0点	10点	25点

基準三

論理		
③	②	①
流れに沿っておらず納得できない	流れに矛盾・飛躍・不足がある	具体例から意見への流れに矛盾・飛躍・不足がなく納得できる
0点	15点	30点